

## 「書ける」先生も「書けない」先生も 書写の授業に取り組もう

神奈川県横浜市立港南台第一中学校 国語科

### はじめに

港南台第一中学校では、平成一七年度より二年間、横浜市「国語科授業改善モデル作成協力校」として、『読解力』『問題解決能力』の向上を目指す国語科の授業改善―国語科授業のパラダイム転換を目指して―を研究主題として研究を進め、三回の公開授業研究を行った。ここでは、本年二月に実施した書写の授業研究について報告する。

### 当日の授業の概要

当日は一年・二年の二つの授業を実施した。一年生は「空想」を取り上げ、「楷書と行書を比較して、行書の特徴と基本的な書き方を理解する」ことを目標に、書字が得意な教師二名のT・Tで、一人の教師が実際に書字の場面を見せるなどの指導を行った。二年生ではあまり書字が得意ではない教師二名のT・Tにより、「行書に調和するひらがなの

筆使いを学ぶ」「目的や用途に応じて、適切に筆記具を選んで書く」ことを目標に、教材DVDを活用したり、教師が自ら書字を行った後生徒と共に検討する等の活動を行った。

### 国語科における「ティーム・ティーチング」

一つの教室に複数の指導者がいることは、書写のように技能を扱う授業においては特に有効である。

本校では、時間割作成上の工夫により、一・二年生の国語の授業において週一時間のT・Tを設定している。このことにより、生徒に学習に対する集中力を高める支援を行うことができたり、複数の教師の目で評価を行うことにより、より客観性・信頼性の高い評価を行うことができたり、という効果を実感している。さらに、国語科の教師が他の国語科の教師の授業に「T2」として参加することを通じて、必然的に教師どうし授業を見合

うことになり、本校国語科教師の力量の向上にとっても大きな役割を果たしている。

さらに、生徒にとっても、T・Tが日常化しているので、授業に複数の指導者がいることについての違和感や抵抗感が払拭されている。このことは、本校の教職員が「ティーム」で教育活動にあたっていることを常に生徒が実感することのできる機会として重要であると考えている。

### 「国語力」向上のために書写指導が果たす役割

現在国語科で大きな課題とされている「読解力」とは、情報を受信し、思考し、発信することのできる能力である。このような「読解力」を確かな国語力として定着させるうえで、書字能力の向上を欠かすことができないものであると考えている。

受信した情報を整理してその内容をまとめるために書く、自分の思考を確かなものにする

るために書く、発信する内容を整理するために書く、などあらゆる場面で文字をある程度の速さで書くことが必要である。また、発信する形式にもよるが、自分の考えを人に伝えることは基本的に書くことによって行われる。

従って、「読解力」を育てるうえでも、

○書くことを嫌がらない子どもを育てる

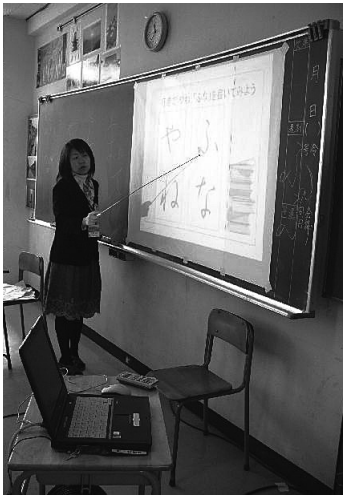
○「人に読まれる」という意識で書くことを育てる

ことが欠かすことの出来ない国語科の学習内容であると言えよう。

## 書写指導の課題と今後の方向性

「書写」の学習については、学習者の側、指導者の側のそれぞれに課題がある。

学習者の側の課題としては、携帯電話や



パーソナルコンピュータの普及等に伴い、自分自身が筆記具を使用して肉筆で文字を書く機会が減少していること、そのため、文字を書く速度が遅くなっていることがまず挙げられる。また、そのために文字を書くことを面倒に感じ、正しい字を書くこととする意識が低下していると思われる。それは、例えば「絵文字」「ギャル字」「クセ字」という形で現れている。

一方、指導者の側には、まず、書写の指導時間を確保する等カリキュラム編成上の課題がある。そのうえ、国語科の教員免許状を取得していても必ずしも書字が得意であるとは限らず、毛筆書写に対する抵抗感を持つ指導者も多い。また、「書写指導」ではなく「書道教育」としての作品主義に陥りがちなことも課題である。

これらの課題を受けて、これからの書写指導の方向性として、本校では次のように考えている。

一つは、硬筆で文字を「正しく整えて速く」書くための書写指導をすることである。日常生活の中では、肉筆で文字を書く機会が多くある。その際に求められるのが、硬筆で文字を「正しく整えて速く」書く能力である。

そして、硬筆の書字能力を向上させるためには、点画、筆脈をきちんと書くことによっ

て、字形が整うことを理解させたい。そのための土台となるのが毛筆書写である。硬筆の書字能力の向上を目指すための毛筆指導という視点で指導にあたる必要がある。

当日助言者をお願いした広島大学の松本仁志先生から、「中学校国語科における書写指導はあくまで国語の授業であり、『書道』教育や作品主義に陥ってはならない。したがって、書字があまり得意でない先生でもさまざまな工夫を行いながら授業を進める必要がある」との助言をいただいた。筆者（三藤）のように書字が得意でない国語の教師にとつて書写の授業は、生徒と共に学ぶことのできる絶好の機会であるとも言える。これからの指導方法を工夫しながら、文字を大切にする授業を進めて行きたい。

かながわけんよこはましりつこうなんだいいちちゅうがっこうこくごか 滝澤なぎさ・央倉美佐・土屋京子・三藤敏樹の四名で、今年度からは文部科学省の「国語力向上モデル事業」の委嘱を受け、引き続き研究と実践に取り組んでいます。